

8 日目 諏訪-11.7Km- 塩尻-6.5Km-洗馬-3.3Km- 本山-7.7Km- 贄川

5月22日、新宿7時発のスーパーあずさ1号に乗り上諏訪で各駅停車に乗り換え、下諏訪到着は9時半。

万治の石仏

まず、諏訪神社春宮の近くのなのに前回見落とした万治(まんじ)の石仏へ。万治3年(1660)と刻まれているのでその名がついたもの、鼻が高く面長で常識的な「仏像」の顔と異なり、胴体部分は手抜きして線刻に近く、稚拙とも思えるが、前に立つとその存在感に圧倒され、無言で暫らく佇み、合掌。

万治の石仏、正面



万治の石仏、側面



諏訪から岡谷へ

中山道に戻り、下諏訪の街中を歩く、標識が無ければ絶対に足を踏み入れないような家と家の間の狭い「軒下」を通る箇所もある。又、玄関の上に弓と矢を飾っている家を見かけたが、このあたりの風習だろうか?

玄関の
弓矢



軒下路地の中山道



今井小休本陣



いつのまにか、諏訪市から岡谷市に変わり、遠くに見えていた山の緑が段々近くなり、木立が増え、山へ入る前に立派な旧家があり、「今井小休本陣」と書かれていた。この付近は旧今井村で、峠への登り口の休憩所だったとのこと。

塩尻峠

夜通道



山道を上がり標高 1055m の塩尻峠へ登る。岡谷市街地は約 800m であり 250m 程の山に登るのと同じで、道は広いが急勾配もあり、途中で膝を休めながら登り、急に視界が開けて自動車道と出会ったところが峠、ここでコンビニで買った握り飯の昼食。峠の上には比較的新しい神社と明治天皇旧跡があったが素通り。下り坂の途中にあったのが、大小2つの親子地藏、小さい方は笑っているように、大きい方は泣いているようにも見える。その地藏の横に立っていたのが「夜通道」、娘が夜這いに通った道



親子地藏

のこと、だからどうしたのと言いたくなるし、それと地藏の関係が分からない。又、山道に「留山につき許可無く入山禁止」とあり、「留山」とは何かが気になってネットで調べると、昔の幕府や藩の公用林らしいが、山主と書いてあるので明らかに今は私有地、謎は解けない。

留山



奥穂高

峠を下り始めると、眼下に松本盆地、正面に見える雪で白く輝く山々は奥穂高、スーパーあずさは登山姿の中高年の男女で一杯だったのを思い出した。

この松本盆地はどこでも、見晴らしさえ良ければ、周囲の白く光る山々が見え、ここは「信州」を実感する。



奥穂高

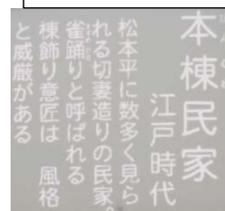
塩尻宿 30 番目

現役時代、塩尻と言えばエプソン、何度も来ているが駅とホテルと客先への移動はタクシーで、街中は何にも覚えていない。中山道はその塩尻中心部から大きく南にそって東から西へ横断している。盆地に下りた近辺は東山地区、国道 20 号線の地下を通り抜け、長野自動車道の上の橋を渡り、旧家が増えてきて、塩尻宿となる。

塩尻宿は宿場としての遺構は少ないが、面白い形の屋根の旧家が沢山あり、最近の家でも同じ形の屋根がある。最も立派な「堀内家」には説明板があり、この建築様式は「本棟」で、屋根の端っこについているものは「雀踊り」と言うらしい。

因みに、堀内家の1階のひさしの上にある白いものは丸石で、海岸近辺では屋根に石を載せているのは珍しくないが、こんな場所では珍しい、風が強いのだろうか？

本棟と雀踊り



雀踊り



本棟の家、比較的新しい



堀内家、江戸時代中期



旅籠いてうや



塩尻宿には前記の本棟の立派な旧家が多いものの、本陣は標識のみ、他に1軒だけ、いかにも江戸時代の立派な建物があり「いてうや(いちょうや)」なる旅籠だった。

可愛い双体道祖神も多い。耳塚なる小さな社があり、素焼きの土器が沢山吊るされており、土器を耳に見立てて、それを奉納すると耳の聞こえが良くなるとのこと、

塩尻宿の双体道祖神



耳塚と奉納された「耳」



塩尻宿を抜けると田園地帯となり、更に歩いていくと一面の葡萄の棚となる。葡萄は甲州ではと考えていたら信濃ワインの広告、なる程、確かに信濃ワインは良く目にする。

初夏の葡萄は緑色でまだ小さく、小指の先ほどもない。

中山道は松本盆地南西部の山並みに近づき国道19号線と合流する。

洗馬(せば)宿 31 番目

肱懸の松



分去の常夜燈



洗馬宿の入り口にあるのが肱懸の松、細川幽齋が「肱かけて しばし憩える松陰に たもと涼しく 通う河風」と詠んだとのこと、將軍秀忠が肱をかけて休んだとの説もある。松自体は何代目かの子孫。 その先に常夜燈があり「分去(わかされ)」道標、分去とは分岐のことで、中山道と善光寺街道の分岐点となる。

ここも宿場の遺構は殆ど残っていない。

民家の玄関の上に貼ってある面白い札を見た、気持ちの悪い絵だが、写真のピントが甘くて xxx 大師と書いてあるようにも見えるが良く分からない、魔除だろうか？

道は山と山の間の川に沿っており、中央本線の線路と並行し、山並みが深くなっていく。

面白い御札



本山宿 32 番目

ここはそば切り発祥の地とのこと、宿場の遺構は殆ど残っていない、案内地図に本山石塔群とあったが、「群」と言うのはちょっと言い過ぎ。いつのまにか双体道祖神を見かけなくなっている。

本山の石仏群



そばきり発祥の地

本山宿そば切り発祥の地
中山道本山宿のそば切りは古くから様々な文献で紹介された。「蕎麦切といっばもと信濃ノ国本山宿より出てあまねく国々にもてはやされる」 風俗文選 森川許六 宝永三年(1706)
「本山のそば名物と誰も知る 荷物をこごにおろし大根」 壬戌紀行 大田南畝 享和二年(1802)
本山宿本陣の大名宿泊帳には、寛文四年(1664)にそば粉が運物として用いられ、寛文六年(1670)に丹羽式部少輔(美濃岩村海主丹羽氏純)に「そば切御上げ申し候」と記録されている。これらの文献よりそば切の発祥の由縁となっている。

「日出塩の青木」と書かれているので一体何だろうと思ったら、「洗馬の肱松 日出塩の青木 お江戸屏風の絵にござる」と書かれている。 日出塩(ひでしお)とは当地の地名でここに青木(樹木のアオキ)があり、洗馬の肱懸松と対で有名だったらしい。

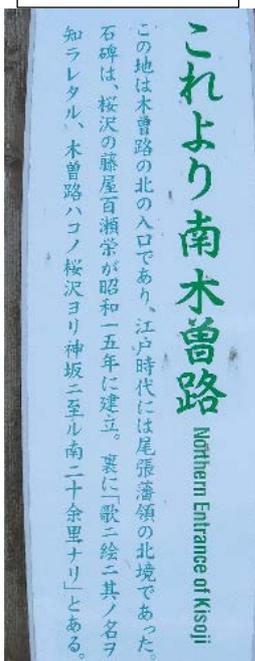
そのアオキも今は何代目の子孫で小さい木。 日出塩の地名の由来が知りたくてネットで調べた。 太平洋と日本海からの両方の塩の道の終点が塩尻、しかし日出塩はわからなかった。

木曽路の交通標識、右側の歩道が旧中山道



木曽路の碑

木曽路の説明



石碑



本山の集落を出ると人家は無くなり、山あいの川と線路に並行する国道 19 号の歩道を暫らく歩くと、まず自動車用の交通標識に「是れより南 木曽路」が現れ、更にその先に小さな広場があつて、そこに有名な石碑が有る。「歌に絵にその名を知られたる」木曾！ 信濃路を出てついに木曽路となる。

贄川(にえかわ)宿 33 番目

谷川沿いの国道から山側の道に入り山腹を歩くと人家が少しづつ増えてくる。 時刻は 5 時を過ぎ、左手の山腹に映る右手の山の陰が大きくなるが、上空は明るい。

山から谷川沿いの国道に下りてきたところが贄川宿、ここに温泉があり熱湯がでたので贄川の名となった。宿場の入り口に関所が復元されているが、既にクローズ、外側から写真のみ。 こここも宿場遺構は殆ど無いが、ユニークなガラス窓が目を引く旧家があった。

贄川関所



ユニークなガラス窓の旧家



宿場の外れに大きなトチの木があり、樹齢千年以上、高さは32m、根元周囲10m以上で長野県天然記念物になっている。江戸時代初期には既に大木として記録に残っているとのこと。

老巨木のトチの木



マンホールの蓋

岡谷は市の花のツツジ、市の名前はない。 塩尻の東山は草競馬、本山宿は宗賀南部地区農集排と書かれているが意匠は不明、贅川は関所。

岡谷



塩尻、東山



本山



贅川



贅川駅から中央本線に乗って歩いたコースを車窓に見ながら塩尻へ逆戻り。本日は塩尻泊、歩数は5.6万歩。

8日目

